

●往復書簡 反戦運動と反グロ運動をめぐるって

天野恵一×国富建治

第1信 天野恵一より国富建治さんへ

日本に反グロバリゼーションの運動は上陸したのか？

おつかれさんでした。あなたも、洞爺湖G8サミット期間中に六〇歳の誕生日をむかえると言っていましたから、今は私と同じ歳になっているわけですね。

それにしても、六月二十八日の「SHUT DOWN」貧困と環境破壊のG8サミット（私たちは「生活の営みを破壊する『軍事化』を許すのか？」の分科会を担当）、二十九日の「オルタナティブ・サウンドデモ」を本格的なスタートとした札幌でのサミット期間（七月七日～九日）連続の行動は、真夏の暑さの中ということもあり、本当に老人の肉体にこたえましたね。

もともと、「反安保実」からみの直接の任務がある行動がすんだら、救援会づくりに協力してすぐ（三泊四日）帰ってきた私とは違って、あなたはフルにつきあつたのですから、私以上に大変だったでしょうが。

しかし、東京の「連絡会」の準備過程の信じられないゴタゴタにまきこまれていた私には、とくかくそれでも「なんとかなった」という気分ですが、あなたはどんなふうに考えていますか。

突然「デモ指揮者」をおおせつかった七月四日（夕方）のデモ。解散の公園が見える地点で警察が「申請の四五分がすぎた、すぐ解散しろ！」と叫びだし、本当にデモが解散しかかり、歩道が大混乱になりかかると、なんとかストップし、東京ではおなじみのデモ指揮者グループ全体で、警察への抗議を重ねつつ、「解散するな」と呼びかけ公園へ何とか隊列を押し込みました。このふざけた（私たちを直接規制していた大阪府警の警官すらあきれていた）挑発的警備にやりかえし、汗だくの体を引きずって、友人たちとラーメンをほうばっている時、夜のパーティ会場へ来てくれと、あなたからの電話。なんと札幌の「デモ申」の代表者らに、警察への出頭命令が出ているというではないか。翌日の大デモへの脅迫がねらいなのは

間違いない。なんという、強権的な手口。

その件の打ち合わせや、あれやこれやで深夜まで動き回った後、二人でホテルへ帰り、その日、札幌入りした武藤一羊さんの部屋を訪ねました。その時、ベッドの上に座っていた武藤さんに「これで、日本にも反グロバリゼーションの運動が定着していく一歩が踏み出された、いえるかな」と語りかけられましたね。

とにかく全身クタクタで、翌日（もう当日になっていたかな？）のデモ指揮をも無事にとめることしか頭になかった私には、その時「なんとも元気な老人ですな」という皮肉な気分で聞き流すしかなかった言葉でした。あなたは、イスの上ですでに居眠りしだしていたかもしれませぬ。

しかし、この言葉は、後まで耳に残りました。私の実感としては、運動を準備した方（とりあえず東京グループ）は、混乱に次ぐ混乱をくりかえしていたというのが実感です。大きな諸グループが集まった共同行動を、私たちは何度も経験してきましたが、私は、これだけ無責任事務局によるシッチャカメツチャカな行動を体験したことはありません。毎日、頭に來ることの連続でした。この点は、あなたの実感ともそう遠くはないはずですよ。

ところが札幌行動を駆け抜けながらよく見えてきたのは、各グループ・個人とも、大量の外国人行動参加者を抱え、共に行動するという、まったくなれない、自分たちの力量を越えた作業にアタフタしているという事実でした。つまらない内部対立に引きずりまわされて、札幌の友人たちの努力を考えれば、まったくみつもなくて話にならない混乱の極みの「連絡会」運営も、誰それが「おかしい」というような個人的な問題あるいは、若い奴らは他人とまともに口もきけない外国好きの「メール・バカ」であるといった世代の問題というより、それは反グロバリゼーション運動の世界的なうねりをはじめて日本に着地させる日本側の主体が必然的に背負いこまざるを得ない混乱であったのだらうと思えてきました。

だとすれば「混乱」の主体相互が正直に向き合った、「反グロ」運動は日本に上陸したといえるのか、をめぐる、まともな運動の総括論議こそが、今こそ大切だ、そんな思いを強めています。

第2信 国富建治より天野恵一さんへ

それでも「反グローバリゼーション」運動は上陸した

天野さん、「疲れた」とばかり言っていると本当に減入ってしまうので、なるだけ気を張って言おうとは思えないようにしているのだけれど、やっぱり心身とも思うように回転しませんね。

私は、G8 洞爺湖サミットへの闘いが、今後の日本の運動にとって決定的に重要だと考えていました。それは、やはり新自由主義的な「グローバル化」に対する闘いが、「世界

社会フォーラム」などの紹介にとどめることなく、具体的な日本の現実に根ざした社会運動として踏み出すことができるのか、という思いがあったからです。たださすがに「世代交代」を意識しなければならぬ年齢になったこともあり、自分のスタンスについて決めかねていたところもありました。

しかし実際にはどうだったかというところ、出発前は八年前の沖縄サミットの時と同様にツアー募集の「旅行代理店」下請け業務、相変わらずのデモ・コールや警備、テントや机・椅子の運び出しと撤収、外国ゲストの出迎え、「入国拒否」



された人びとへの対策のための連絡、さらには突然の「通訳」など、本日に朝から深夜までクタクタでした。まあ、サミット本番の三カ月前ぐらいにはそうなることはある程度予測しており、だから最後まで見届ける義務があると思って、無理を承知でサミットが終わるまで北海道にすることにせざるをえなかったのですが。あれこれと色んなことがすぐ気になってしまい「老婆心」ならぬ「老爺心」を払拭できないのが私たちの宿命なのかもしれません。

天野さんの言うように、今回のG8サミットを問う連絡会は、企画や財政などふくめてスタートからなかなか機能せず、何がどうなっているのかを誰もわからないままに本番を迎えるという結果になってしまいました。G8サミットという大きな国際イベントに対するさまざまな運動の調整には、私たちの主体的力量がまったく追いついていないことを改めて実感しました。

しかしこの混乱とドタバタを抱えながら、「新自由主義的グローバリゼーション」に対抗する運動は、やはり日本に「上陸」したのだ、と考えています。八年前のG8サミットの時、その前年のシアトルWTO閣僚会議反対闘争のように、「反グローバリゼーション」運動の拡大の兆しが見えていました。そして沖縄サミットでは、それまでの日本の「反サミット」の闘いが一日の集会とデモで終わったのに対して、ジュビリー・キャンペーン、私たちの担った「民衆の安全保障国際フォーラム」、女性サ

ミット、環境、労働の国際会議など、パラバラであったとはいえ多様なテーマでの取り組みも行われました。

天野さん、覚えていますか。この年の暮れ、二〇〇〇年の一月一六日に「沖繩サミット」対抗運動の検証——次のステップへ」というシンポを私たちが持ったことを。ピーブルズ・プラン研究所、反安保実V、NC C、「けし風」編集委員会、「満月まつり」実行委員会、基地・軍隊を許さない行動する女たちの会、沖繩環境ネットワークが共催したこのシンポでは、当時「かけはし」に私が書いた報告記事によれば、武藤一羊さんは「シアトルでWTOの会議を流会に追い込んだ闘いの流れがストリートに沖繩で表現されることはなかったものの、沖繩サミットではさまざまな国際会議が交差し、多様な異議申し立てが行われたことに意義があった」「こうした運動の文化・構造の複数化を生かしつつ下からの非軍事化のネットワークを」と述べています。

八年前、この「多様性」の検証の試みが行われたのは、サミットが終わってから五カ月も経ってからでした。八年後、この「多様性」はサミットの一年近く前から交差を試み、それぞれ「多様性」というきれいで済ませられない対立を際立たせながら、どうにか前に進もうとしているのではないか。だからこそ前に進めるためにも今回の総括が必要なのであり、わが世代としてはこの八年間の捉え返しが必要だと思っております。

第3信 天野恵一より国富建治さんへ

今回の反G8行動は、私たちにとって、小さな「シアトル」であった

国富さん、あなたの「わが世代としてはこの八年間の捉え返しが必要」という主張に強く共感します。

「沖繩」サミットが終わって五ヶ月後のシンポについては、すっかり忘れていました。私は、あなたにこのシンポについて紹介され、あらためて思い出した集まりがあります。

一九九九年一月五日のシンポです。「『民衆の安全保障』とは何か？

——米軍基地の「県内移設」に抗する沖繩と私たち。これは「PP研」と「反安保実」の共催の集まりで、太田昌国さんが司会、私と新崎盛暉さん、源啓美さん、松井やよりさん（まだ元気でした）、ダグラス・ラムスさんが発言者でした。その時、ラムスさんは、シアトルのWTO閣僚会議が「見事に失敗に終わった」という当日朝の新聞を読んだかと話しました。彼は当日のそのニュースで、話すテーマを変えたと言っています。それくらい大問題が起きた。集会記録のパンフレットがつくられていますので、ラムスさんの発言を引用します。

「これは大きな事件なんです。新聞で読んでアメリカの友達に電話して今朝聞いたんですが、五万人ぐらいの人が集まったんです。びっくりしますよね。二年前、デンバーでG7・5——G8になりかけていたのですが、数百人が集まってシンポジウムやって、解散したんです。興奮するような事件じゃなかった。それがシアトルでは、五万人集まって数百人逮捕され、戒厳令に近い状態になって、



久しぶりに催涙ガスが流されたりして、友だちによれば、催涙ガスって中にいなければ大丈夫で逃げればいい、それでみんな興奮して喜んで言うてました（笑）。デモに参加した人たちが興奮したなんてことは、ものすごい久しぶり。アメリカではこういう事はあまり最近なかった。若者もたくさんいたと言う話も聞きました。／何が起きているのか。今まで経済問題に関してあんなに大きなデモは無かった。ひとつは、グローバリゼーション——経済制度の国際化、多国籍企業について、人び

とがたくさん本を読んだりして経済力の集中の問題を意識しだしている。合衆国だけではなくていろんな国から人が集まったと思いますけれども、だんだん問題意識が広がっている。政治的教育効果が上がっているなどという、いい事件でしたね。

この後、彼は暴力的なアナキストもアメリカ主流の労組もNGOもともに集まり、「数が増えればいい」というセクト的対立はない結果だった、とも語っています。

ラミスさんの「興奮」は、この東京での、本番の沖縄サミット対抗行動ののり前段集会に来ていた人たちに、それなりに共有された

と思います（彼の発言は、それほど浮いていなかった）。反グロの運動の波は、あの段階でも、私たちに押し寄せてきてはいたのです。それでもあれだけ丁寧な準備した沖縄サミットへの私たちの運動は、まだ「反基地国際会議」という枠を突破する内実はつくり出せなかったと思います。

アメリカ中心の「反テロ」戦争の拡大は、状況を決定的に変えました。今、グローバルゼーションとは経済体制だけでなく、それを支えるグローバルな政治・軍事体制の問題であることは、私たちにもよく見えてきました。そしてアメリカ帝国を中心に囲むG8の集まりがその体制をシンボリックに表現する集まりであることも。だから、今回の反G8（洞爺湖サミット）行動は、私たちにあって、小さな（シアトル）であったのだ、ということに自覚すべしという、あなたの主張に賛成します。その自覚を深め、「具



落させてきた私たちの、この間の歴史を終わりにさせなければいけない。若者は、歴史が欠落してしまっているからこそ「若者」なのではないから、とつくに若者ではなくなっている世代の私たちは、「奴らにもわかっ

第4信 国富建治より天野恵一さんへ

G8の「安心・安全」に「民衆の安全保障」をどう対置しようのか

天野さんへ。

G8サミットを振り返って見て、前便にも述べたように、全体としては、新自由主義的グローバル化の抱える矛盾が多くの人びとにはつきりしたものに

らも小泉「構造改革」路線のもたらした貧困・格差・生活破壊の現実への怨嗟の声が高まっていることを実感しています。しかし忘れてはならないのは、G8という枠組みを背景にして、グローバルな「軍事」と「治安監視社会」の問題については、依然として強化されていることです。

G8サミット首脳宣言では「平和構築」のための「軍、警察、文民という相互に関連する3つの焦点となる分野における世界的な能力向上」が改めて強調されています。また「テロ対策におけるG8首脳声明」では、「テロ対策行動グループ（CTAG）を通じて国連テロ対策委員会……との効率的な協調を強化させることで、G8及び国連の中での協力を更に強化する」としており、さらに「我々は、テロリズムを抑制及び終了させるための努力の一部として、暴力につながる過激化の防止の決定的な重要性を認識する」と強調しています。

そして新自由主義的グローバル化の進め方について、あるいはイラク戦争について、米国とEU、さらにロシアや中国との間に少なくない相違や対立があったとしても、この「テロ対策」と社会運動・抵抗運動の「暴力化・過激化」に対する措置においては「一致団結」しているというべきでしょう。そしてまた「テロ組織」と「過激化する反グローバル化運動」が直結しているという彼らの認識が浮かび上がってきます。こうした認識は、今日の米軍再編と「戦争国家」体制づくり、国連を通じた「国際貢献」と派兵恒久法、「集団的自衛権」、そして9条改憲という流れの背景にある彼らの時代認識です。

私たちが「新しい反安保行動をつくる実行委員会」を立ち上げたのは、一九九五年の沖繩での米兵による少女への性暴力事件をきっかけにした「島ぐるみ」の反基地闘争がきっかけでした。同時に私たちの実行委員会の結成は、一九九一年の湾岸戦争を背景にしたPKO派兵や「国際貢献」論などの、ポスト冷戦状況での「新しい戦争」と反戦運動をめぐるさまざまな論争を背景にしたものでした。沖繩の反基地闘争は、こうした「ポスト冷戦」下での沖繩基地の強化された現実や、日米安保のグローバル軍事同盟としての変質の中でもたらされたものであり、それは新自由主義的グローバル化の展開過程と呼応したものでした。この中から、社会・経済全

体を包み込む広がりを持った「軍事化」の真相に迫り、それをつき崩す論理を「非軍事化」を中心的概念とする「民衆の安全保障」として模索していく歩みを始めていきました。

そして二〇〇一年の9・11とアフガニスタン戦争から二〇〇三年のイラク戦争という、「対テロ」先制攻撃戦争の過程でも、幾つもの論議の材料が噴出してきました。たとえば「テロにも報復戦争にも反対」というスローガンに関する論争や、いわゆる「テロリズム」「自爆テロ」などに対して反戦運動主体が、どのような評価を持つべきかなどです。私自身も歴史的な「武装解放闘争」を相対化しつつ、「非軍事化」について本格的に考えるようになったのは、この九〇年代以後の経験の中からすぎません。

「対テロ」というG8の軍事・治安戦略は、自衛隊と警察、海上保安庁などが連動したサミット警備という「治安出動訓練」に表現されていますが、それはアフガニスタンへの陸上自衛隊派遣や、スーダンへのPKO派兵につながっています。「人道的国際貢献」の名の下で「援助・災害救援の軍事化」も拡大しています。

私たちは、この間の自分たちが積み重ねてきたこうした「運動経験」や論議の蓄積を、「上陸」した新自由主義的グローバル化に対する闘いをふくめた運動状況の転換の中で、どう意識的に生かそうとするのが問われているのだと思います。こうしたところに今や力量的に疲弊している反安保実の運動の役割の一つがあるのでしょうか。G8の「安心・安全」に対して「民衆の安全保障」をどう対置しうるのか——このあたりをベースにして、さらに開かれた討論を追求していきたいと思えます。